

スウェーデンにおける労働者階級の形成をめぐって

—労働組合運動と労働者文化（下）—

石原 俊時

- | | |
|------------------------------|----------------------|
| 1. はじめに | 4. 労働者文化をめぐって(以下 本号) |
| 2. 労働者階級形成の背景 | 5. おわりに |
| 3. 労働組合運動の生成と展開(以上 第48巻 第2号) | |

4. 労働者文化をめぐって

近年、スウェーデンでは、労働者文化をめぐって歴史学や民族学の分野で活発な学際的な議論が行われている。その導火線の役割を果たしたのが、アンビョンソンの著作であった¹⁾。彼は、今世紀初頭のスウェーデン労働者階級には、“skötsam”な文化が形成されたとして、スウェーデンの労働者文化を“skötsam”という概念から捉えようとした。“skötsam”とは、通常、堅忍不拔なといった意味であるが、彼はこの言葉を、酒飲みではなく(nykterhet)、約束を守り(ordhållighet)、自己統御(besinning)し、思慮深いこと(eftertänksamhet)を表す意味で使っている。いわば、“skötsam”な労働者とは、労働者の模範たる「リスペクタブル」な労働者のことなのである。

彼の研究は、スウェーデン北部のノルランド(Norrland)の製材所を中心とした町ホルムスンド(Holmsund)において、労働運

動が禁酒運動と密接な関係をもって展開する中で、その製材所の労働者や港湾労働者の間に「リスペクタブル」な労働者が出現し、台頭していった状況を分析したものである。とりわけ彼がそうした「国民運動」の団体生活で注目したのが、学習サークル(studiecirkel)であった。学習サークルとは、読書サークルと図書館活動や講義を有機的に統合した学習活動の一形態である。「リスペクタブル」な労働者とは、学習サークルでの活動に見られるように、何より議論し読書する労働者なのであった²⁾。そして、このような労働者の出現と普及は、この町を支配していたパターナルな秩序を解体し変質させていった。使用者は、今や労働者を対等な人格と見なすようになり、地方議会にも「リスペクタブル」な労働者が進出して、そこに大きな政治的影響力を及ぼすようになったのである³⁾。

このような彼の研究は、ウプサラ大学で行われた「国民運動」研究のプロジェクトを継

2) Ibid., s. 71-95. 学習サークルについては、拙稿「スウェーデン社会民主主義における教養理念の展開（下）」(東京大学)『社会科学研究』第46巻、第5号、1995年を参照。

3) R. Ambjörnsson, a. a., s. 225-229.

1) R. Ambjörnsson, *Den skötsamme arbetaren*, Stockholm 1988.

承・発展させようというものであった。即ち、そのプロジェクトの総括において、「国民運動」の展開は、中間層の価値観を社会全体にわたって浸透させた過程であったと主張されたのであるが⁴⁾、彼は、労働者文化を対象とし、特にプロトコールなどの解説を通じてその日常生活を分析し、労働者階級の存在形態や心性を解明することを通じて、その主張を具体的に検証しようとしたのである⁵⁾。

こうしたアンビョンソンの研究に対し、戦間期のストックホルム・セーデル地区 (Söderkvarter) における都市下層民 (貧しい下層中間層や労働者) の文化を研究していたフランセーンが、スウェーデンの労働者文化を "skötsam" の概念で捉えることについて異議を申し立てることとなる。彼が、そうした労働者に見いだしたのは、酒飲みで、粗野な言葉を吐き、感情をすぐ露にする、「リスペクタブル」な労働者とは全く正反対の生活様式あるいは行動様式であった⁶⁾。彼は、こうした労働者を "egensinnig" (「頑迷な」の意味) な労働者と規定し、「リスペクタブル」な労働者と対比したのである。例えば、彼によれば、前者は社会の近代化が捨ててきたものに固執した生活様式を、後者は近代化の帰結を積極的に受けとめた生活様式を営んでいた。彼はそこで、アンビョンソンがもっぱら "skötsam" の概念でスウェーデンの労働者階級の文化を把握しようとしたのに対し、それを "skötsam" と "egensinnig" を両極とする座標軸で捉えるべきだと主張したのである。そして彼は、「リスペクタビリティ (skötsamhet)」を代表する労働運動の文化と未組織労働者など「頑迷さ (egensinne)」を強く示した労働者の文化を区別すべきであると述べ、さらに労働運動の内部でもリーダーとマスでは「リスペクタビリティ」あるいは「頑迷さ」の現れ方が異なるのではないかといった問題を提起したのであった⁷⁾。

それに対し、民族学者スカーリン・フリユクマンなどによって、人間存在は矛盾に満ち、同じ人間でも局面・局面で「リスペクタブル」にも「頑迷」にもなるとの指摘がなされた⁸⁾。しかし、「リスペクタビリティ」と「頑迷さ」それぞれを理念型として、スウェーデンの労働者文化の生成・展開を見てゆくことの意義は次第に認められつつあるのである⁹⁾。以下

それに対し、民族学者スカーリン・フリユクマンなどによって、人間存在は矛盾に満ち、同じ人間でも局面・局面で「リスペクタブル」にも「頑迷」にもなるとの指摘がなされた⁸⁾。しかし、「リスペクタビリティ」と「頑迷さ」それぞれを理念型として、スウェーデンの労働者文化の生成・展開を見てゆくことの意義は次第に認められつつあるのである⁹⁾。以下

7) M. Franzén, "Egensinne och skötsamhet i svensk arbetarkultur," i: *Arkiv*, Nr. 48-49, 1991. "egensinnig" とは、「我が儘な」「意にそわぬ」などの意味を持ち、ドイツ語の "eigensinnig" に相当する。この言葉は、リュトケが、第二帝政期ドイツの労働者に対しても用いている。A. Lütke, "Organizational Order or Eigensinn? Workers' Politics in Imperial Germany", in: W. Sean ed., *Rites of Power. Symbolism, Ritual, and Politics Since the Middle Ages*, Philadelphia 1985.

8) B. Skarin Frykman, "Arbetarkultur och arbetarkulturforskning," i: *Arkiv*, Nr. 48-49, 1991, s. 32. 同様の指摘として、M. Lindkvist, *Klasskamrater*, Lund 1987, s. 170 を参照。

9) B. Horgby, "Långa och korta planeringsperspektiv i arbetarkulturen," i: *Arkiv*, Nr. 48-49, 1991, s. 50 ; *Dens.*, *Egensinne och skötsamhet*, Stockholm 1993, s. 16. なお、周知のように、従来イギリスの労働貴族の「リスペクタビリティ (respectability)」はしばしば研究の対象となってきたのであり、前

4) S. Lundkvist, *Folkrörelserna i det svenska samhället 1850-1920*, Uppsala 1977, s. 195. この研究プロジェクトについては、拙稿「世紀転換期スウェーデンにおける禁酒運動の展開」岡田与好編『政治経済改革への途』木鐸社、1991年、101-103頁を参照。

5) R. Ambjörnsson, a. a., s. 235-238.

6) M. Franzén, "Ölkaféet och det folkliga drickandet. Exemplet centrala Katrinen under 1900-talet," i: *Arkiv för studier i arbetarrörelsens historia* (以下 *Arkiv* と略記), Nr. 43-44, 1989 ; *Dens.*, *Den folkliga staden*, Lund 1992.

では、こうして「リスペクタビリティ」あるいは「頑迷さ」といった概念をめぐる展開することとなった労働者文化研究の状況を見てゆくこととする。

(1) 「リスペクタビリティ」及び「頑迷さ」の歴史的位置づけ

マグヌソンは、19世紀前半のエスキルトーナの金属加工業における手工業文化を研究し、これを“bråkig”（「始末に負えない」の意味）な文化と名づけ、それを保持する職人や徒弟が、使用者及び都市の支配層によって非道徳的で規範から逸脱した者と見なされるようになる過程を描いた。例えば、そうした職人や徒弟の生活においては、労働と余暇は未分離で決まった労働時間ではなく、彼らは、気が向けば仕事を勝手に休んだ。また、原料をくすねて自分で加工し売り払うといったごまかしをした。さらに、居酒屋でござりあい、しばしば稼いだ金をすぐ使いきってしまったのである¹⁰⁾。

こうした研究が現れ、このような手工業文化を含めた前工業化期の民衆文化への関心が

述のように、リュトケはドイツの労働者に対し“eigensinnig”の概念を用いたのであった。このように、「リスペクタブル」や「頑迷な」といった概念は、スウェーデンの労働者文化の理解のみではなく、概念の国による差異を明らかにすることを第一歩として、労働者文化の国際比較の一つの糸口となると思われる。

10) L.Magnusson, *Den bråkiga kulturen*, Stockholm 1988, Kap. 7,8,9,10. マルメーにおける同様の伝統的手工業文化の存在を指摘しているものとして、L.Edgren, *Lärling - Gesäll - Mästare*, Lund 1987, Kap. 7. こうした伝統的民衆文化が「始末に負えない」ものと見なされるようになったのは、ピーター・バーク (Peter Burke) の指摘した、近代ヨーロッパにおける民衆文化とエリート文化の分離といった現象を背景にしていると思われる。P.バーク (中村賢二郎・谷泰訳) 『ヨーロッパの民衆文化』人文書院 1988年, 350-363頁。

高まる中で、前工業化期の民衆文化と「リスペクタブル」な或いは「頑迷な」労働者文化との関係が問題となってきた。とりわけ「始末に負えない」文化から「リスペクタブル」な文化への移行の問題が労働者文化をめぐる議論の一つの焦点となったのである¹¹⁾。

この問題については、ホリビの整理が有用だと思われる。彼は、まず伝統的な生活様式はその時々感情、利害に左右される刹那的な行動で特徴づけられるのに対し、「リスペクタブル」な生活様式及び行動様式は、将来を見据えて行動することに基づいたものであると考えた。そこで彼は、労働者の「始末に負えない」文化から「リスペクタブル」な文化への移行を、将来にわたって自己の人生を設計するようになる生活の計画パースペクティブ (planeringsperspektiv) の長期化という点から把握しようとした。そして、生活の計画パースペクティブを経済的パースペクティブと社会的パースペクティブに分類し、それを各々、短期と長期に分けた。短期的・経済的パースペクティブとは、彼が負債の経済 (skuldekonomi) と呼ぶもので、宵越しの金を持たず質屋通いをするような行動様式を指す。それに対し、長期的・経済的パースペクティブとは、節約し貯金をし、将来に備えるような行動様式を意味する。これは、節約の経済 (sparekonomi) と呼ばれた。一方、短期的・社会的パースペクティブとは、集団の形成が短期的な利害からなされることで、長期的・社会的パースペクティブとは、目先の損得はともかくとして、長期的にはそれによって自己の地位を向上させる目的で集団を形成してゆくことである。彼は、こうした短期・長期の社会的パースペクティブを、労働

11) B.Skarin Frykman, a.a., s. 29 ; L. Edgren/L.Olsson, "Arbetare och arbetsliv. Svensk arbetarhistorisk forskning", i; K.Misgeld/K.Å mark, *Arbetsliv och arbetarrörelse*, Stockholm 1991, s. 25.

組合の流動的なメンバーと恒常的なメンバーの行動様式を比較することで説明している。また、初期の労働者のストライキに見るような自然発生的で突発的な集団的な行動と、強固な組織を基盤とし綿密な計算の上に規律と統制をもって行われるストライキとの差も、社会的パースペクティブの長さの違いによって説明されるのである。こうした議論に従えば、「リスペクタブル」な労働者とは、「始末に負えない」労働者の経済的ならびに社会的パースペクティブが長期化することによって出現したということとなる¹²⁾。

また彼は、これとは別の角度からこの移行の問題を論じている。即ち、彼によれば、前工業化期の民衆文化においては、名誉の感情が各自の行動を律する中心的なメカニズムであった。名誉にふさわしいふるまいをすることでその社会的地位を維持し、それをし損なえば、地位を失ったのである。それに対し、「リスペクタブル」な文化においては、各自の行動を律するものとして超自我が形成され、自己統御がそのメカニズムの大きな部分を占めるようになった。つまり、「始末に負えない」文化から「リスペクタブル」な文化への移行は、外面的な規律から内面的な規律への移行、いわば、「恥の文化」から「罪の文化」への移行と捉えられたのである¹³⁾。

そしてさらに彼は、こうした「始末に負えない」文化から「リスペクタブル」な文化への移行を、マックス・ヴェーバーの議論を踏まえ、「伝統主義」を脱却する「脱魔術化」あるいは「合理化」の過程として総括することとなる¹⁴⁾。

このような枠組に依れば、後でも見るように、「頑迷な」文化は、短期的な計画パースペクティブや「恥の文化」或は「伝統主義」で特徴づけられる、前工業化期の民衆文化の後裔として位置づけられるであろう。しかし、イエーテボリーの港湾労働者の文化を研究した民族学者ビョルクランドによれば、そうした労働者の伝統的な行動様式は、社会の合理化・規律化に対し、労働者が集団あるいは階級としてのアイデンティティを確認しながら、伝統的な権利を維持しようとする集団的な労働者の防衛戦略と考えられるべきなのであった。労働者は、そのように行動することで、伝統的なやりかたで働いて、労働のテンポを自分で決定し、自分が望むところにいつでも行き来するなどの慣例を仲間と確認しあいつつ、維持しようとしたのである¹⁵⁾。それ故、ホリビィも言うように、「頑迷な」振る舞いを単に伝統的な民衆文化の残滓と捉えるのではなく、「リスペクタビリティ」と同様に、労働者の工業化に伴う社会の規律化・合理化への対応でありなおかつ労働者の階級意識の現れとして考えるべきだと思われる¹⁶⁾。

一方、スカーリン・フリュクマンは、「リスペクタブル」な労働者文化における女性や家庭の位置をめぐる、「リスペクタビリティ」の前工業化期からの連続性という論点を提示した。同じく民族学者であるブレムベックの19世紀後半の農村の子育ての研究によれば、当時の農村における子育てにおいて、目上の者に対し忠実で、物静かで、沈着であり、控えめで、敬虔であるという価値が追及されていた¹⁷⁾。彼女は、このような研究に拠りつつ、

12) B.Horgby, "Långa och korta planeringsperspektiv i arbetarkulturen"; Dens., *Egensinne och skötsamhet*, s. 179-204.

13) B.Horgby, "Traditionen och förändring i arbetarkulturen 1850-1940", i: *Scandia* 56:2, 1989, s. 303; Dens., *Egensinne och skötsamhet*, s. 159-177.

14) Ibid., s. 205-238, 271-272.

15) A.Björklund, *Hamnens arbetare*, Göteborg 1984, s. 174-178.

16) B.Horgby, *Egensinne och skötsamhet*, s. 16.

17) H.Brembeck, *Tyst - lydig - arbetsam*, Göteborg 1986, s. 67.

こうした価値や規範は、恐らくかなり古くからのもので、けっしてこれまで言われてきたような「始末に負えない」文化に属するものではなかったと考えた。それ故こうした価値や規範は、「リスペクタブル」な文化につながるものであり、「リスペクタブル」な労働者文化の生成の背景として、都市の労働者階級の大部分が、幼児期をそのような家庭で育てられたことに注目すべきだと主張したのである¹⁸⁾。

こうした彼女の主張は、次のような二つの問題につながっていると思われる。まず第一に、前工業化期の民衆文化は、19世紀の中間層の捉えた放縦で無秩序な「始末に負えない」側面のみならず、恐らくそうした中間層から見ても規律をもった秩序だった側面を持っていたのであり、そのような前工業化期の民衆文化の多面性・多様性に注目しつつ、「リスペクタブル」な労働者文化への移行を考えねばならないことである。即ち、「リスペクタブル」な労働者文化に見られる内面的な規律は、前工業化期の民衆文化の全面的否定の下に成立したわけではなく、そこでのある部分を継承・発展させて成立したと思われるのである。それ故、前工業化期の民衆文化の多面性・多様性を検討した上で、それとの間での連続と断絶の双方の側面から、「リスペクタブル」な労働者文化の生成を捉えてゆくべきであろう¹⁹⁾。

そして第二に、男女関係や自律的文化領域

である家庭をも対象として、「リスペクタブル」な労働者文化への移行の問題を考えるべきことである。これは、「リスペクタブル」な労働者文化において、女性や家庭が如何に位置づけられていたかという問題に関わっている。アンビョンソンは、「リスペクタブル」な労働者として男子成人労働者を分析の対象としたのであるが、女性も、労働者として、妻として、母として労働者文化の一翼を担ったのである。この点の検討を抜きにして「リスペクタブル」な労働者文化の全体像は把握しえないことは明確である²⁰⁾。また、職場とは異なる論理を持って営まれる家庭での親子関係や夫婦関係の変化は、この移行にとって

20) 例えばノルドベリイは、アンビョンソンが扱ったホルムスンドの「リスペクタブル」な労働者の妻はどのような存在であったのかを問題にしている。彼女らは、「リスペクタブル」な労働者の形成した公共性においては従属的な地位に留まり、妻として「リスペクタブル」な労働者を支え、母として子供を「リスペクタブル」に育てあげることが期待されていた。K.Nordberg, "De skötsamma fruarna i Holmsund", i: *Häften för kritiska studier* 1990: 2. かつてヨハンソンは、女性の政治的公共性への進出は、「国民運動」の下で飛躍的に進んだことを主張したのであった。H.Johansson, *Den svenska godtemplarrörelsen och samhället*, Stockholm 1947, s. 41-42; Dens., *Folkrörelserna och det demokratiska statsskicket i Sverige*, Karlstad 1952, s. 76. しかし最近では、世紀転換期の労働運動（労働組合運動の他、政治運動、協同組合運動などを含んだ社会民主主義運動）の公共性においては、女性の地位は従属的で、女性に関わる政治的問題のみに従事することが求められていたことが指摘されている。C.Carlsson, *Kvinnosyn och kvinnopolitik*, Lund 1986. 「リスペクタブル」な労働者文化は、こうした女性の問題を視野に収め、家庭の機能を解明せねば、その全体像を明らかにできないと思われるのである。今後の検討の課題としたい。

21) B.Horgby, *Egensinne och skötsamhet*, s. 122.

18) B.Skarin Frykman, a.a., s. 37.

19) 例えば、ヴィンベリイは、代表的なプロト工業地域であるビューヘラード（Sjuhärads）地方のマルク（Mark）郡では、農業不況を伴った大不況の影響もあって多くの農民やプロト工業従事者が没落して工場の労働者となっていたが、ピエティズムが彼らに工場での生活に意味付けを与え、それへの適応を助けたことを指摘している。C.Winberg, *Fabriksfolket*, Göteborg 1989, Kap.6.

重要な役割を果たしたと思われる。例えば、ホリビイは、「リスペクタブル」な家庭の、そこで育つ子供にとって規律の内面化の場として果たした役割を強調している²¹⁾。それ故、「始末に負えない」民衆文化から「リスペクタブル」な労働者文化への移行は、これまで権力関係論の分析で主要な分析の対象となってきた労使関係や職場のみではなく、男女関係や家庭も問題にしなければならないと考えられるのである。

(2) 「リスペクタブル」な労働者文化への移行の要因

それでは、こうした生活の計画パースペクティブの長期化、規律の内面化、脱魔術化で特徴づけられる「始末に負えない」民衆文化から「リスペクタブル」な労働者文化への移行は、どのようにして起こるのであろうか。この問題については、これまでも様々な要因が指摘されてきた。そしてそれらの要因は、大きくいて、2つに分けられると思われる。即ち、外発的要因と内発的要因である。

外発的要因を強調する典型的な著作が、ホリビイの処女作である。この著作は、フーコーの影響の下に、工場、学校、教会、司法、教育制度といった様々な制度を通じての社会の規律化過程に注目して、その規律化の効果が、職場における労使の力関係によって異なることを示そうとしたものである。そのように権力関係論を用いることは、彼の研究が、ストックホルム大学での労働者階級形成史の研究プロジェクトの系譜を引いていることを示している。具体的には、19世紀半ばから第一次大戦以前のノルシェーピングの手工業熟練労働者、工場労働者（主に繊維・織物工場の不熟練労働者）、屋外不熟練労働者の飲酒や窃盗、暴力行為などの側面から規律化の過程が扱われた。そして彼は、例えば後にも見るように、生産点において自律性を確保していた手工業熟練労働者は、そうした社会の規律化に抵抗

し、よく伝統的な生活慣行を保持していたのに対し、職場の力関係において弱体な工場不熟練労働者が、最もよく規律化されていったことを明らかにした²²⁾。このように日常生活の隅々に規律化の装置が張りめぐらされてゆき、規律のとれた合理的な行動様式・生活様式を押しつけてゆくという外在的かつ客観的な要因を重視し、それに労働者が対応することを強制されてこのような移行が起こったことを強調するのが、この立場である。

これに対し、内発的要因を強調するのが、アンビヨンソンやマグヌソンである。アンビヨンソンによれば、「リスペクタブル」な労働者は、組織労働者が長期的な目的に沿って合理的に行動し、集団的な目的を達成する必要から生まれてきたものであった²³⁾。

この見解をより鮮明に打ち出すのがマグヌソンである。彼は、前工業化期のエスキルストゥーナの手工業文化を扱った著作の中で、そうした「始末に負えない」文化の合理性を強調した。例えば、その居酒屋で職人が互いに酒をおごりあい、酒浸りとなってなければの金を使い切ってしまうことも、そのような仲間づきあいによって社会的帰属意識を獲得する手段であるのみならず、それがインフォーマルな社会的な保護の制度となっていたことを指摘する。即ち、19世紀前半においては従来の手工業的な秩序が動揺し、もはや家父長的な親方との関係もあてにはならず、職場間の移動が激しく雇用が安定しない状況にあって、酒場でののおごりあいは、病気や失業や死亡時などまさかの時の投資の機能を果たしていたのである²⁴⁾。

しかし、工業化とそれに伴う社会変動によっ

22) B.Horgby, *Den disciplinerade arbetaren*, Stockholm 1986. しかし、ホリビイが、内発的要因を重視する立場に移ってきていることは、行論から明らかになろう。

23) R.Ambjörnsson, a.a., s. 261-262.

24) L.Magnusson, a.a., s. 337-345.

てそうしたインフォーマルな社会関係は解体に向かい、しかも社会の規律化、合理化が急速に進展してくることとなる。けれども、そこに労働運動が登場することで、労働者にとって居酒屋でのおごりあいとは別の新たな可能性が開けてきたのである。彼によれば、そのような状況から見れば、労働者が、労働運動における集団的行動とそれを強固なものとする「リスペクタブル」な生活及び行動様式を受容するのは合理的なものであった²⁵⁾。

このように内発的要因を強調する立場の者は、社会の規律化・合理化といった状況の存在を認めつつも、労働者はいやいやながら強制されて規律化されたのではなく、そうした外的状況の変化に積極的に対応していったことを重視する²⁶⁾。そしてその際、労働者が自己の地位を維持・改善してゆくため、使用者に対抗しつつ組織的行動を推進して自己の権力資源を動員していった過程が注目されることとなる。けれども、この内発的要因と外発的要因は互いに排除するものではなく、局面・局面においてからまりながら作用していったものと思われる。我々は、具体的な分析においては、双方の要因を見てゆかねばならないと考える。

一方、こうした「リスペクタブル」な労働者文化への移行において注意せねばならないのが、労働者が、どのような場所において「リスペクタブル」な価値観・行動様式を身につけていったかという問題である。これは

移行のメカニズムを考える際には、不可欠の視点であると思われる。ホリビイは、その処女作において、特に職場における権力関係を重視したのであり、スカーリン・フリユクマンは、家庭の役割に注目した。そしてこうした職場や家庭の他に、娯楽や消費そして社交などの日常生活が行われる場としての地域社会も、注目せねばならないと考える。例えば、「国民運動」の団体生活は、地域社会における日常生活の場の一つに数えられるのである。その重要性は、アンビヨンソンが研究の対象とした「リスペクタブル」な労働者が、後に見るように一般的にはそうした「リスペクタビリティ」とは縁遠い製材所の不熟練労働者や港湾労働者であったことでもわかるであろう。彼は、そこで地域社会において禁酒運動、さらには間接的には禁酒運動を介して自由教会運動が、労働運動と密接な関係を持って展開していたことを重視するのであり、これらの運動が労働者の集合性の性格に影響を与えたことに注目したのである²⁷⁾。

こうして「リスペクタブル」な労働者文化への移行については、職場、地域社会、家庭といった様々なレヴェルで検討し、その相互関係を解明して移行のメカニズムを明らかにしてゆかなければならないと思われるが、その場合も、社会の隅々に規律化・合理化が及ぶという外在的要因とそれに対し労働者がどのように対応していったのかという内発的な要因を見てゆく双方の視点が必要であろう。

(3) 「リスペクタブル」な労働者文化と市民文化

筆者は、本誌前号で、スウェーデン中部の金属・機械工業の中心地であるエスキルストゥーナにおける世紀転換期の労働運動の団体生活を具体的に検討した。そこでは、労働者が、団体生活において、集会を中心とした活動に

25) L.Magnusson, "När fackföreningen utmanade fabriken," i: R.Ambjörnsson/D.Gaunt red., *Den dolda historien*, Stockholm 1984, s. 459.

26) そうした労働者の主体的適応を可能とした要因として、スウェーデン社会における禁欲のプロテスタンティズムの展開があったと思われる。拙稿「世紀転換期スウェーデン労働運動における日常生活」『立教経済学研究』第48巻第3号1995年、第4節②を参照。

27) R.Ambjörnsson, a.a., Del V.

参加し、各自が自分の意見を展開し、プロトコールをつけ、議事の進め方や組織の運営について学んでいたことが窺えた。旧来からの「国民運動」研究で言われているように、その団体生活は、メンバーに民主主義社会の運営に必要な技術、価値観、行動様式を身につけさせる「市民の学校」として機能していたのである。しかし、団体生活は、集会に尽きるものではなく、啓蒙・学習活動や娯楽活動など様々な要素からなっており、しかも、労働運動は、団体生活全体を通じて、労働と余暇を空間的・時間的に分化し、労働者の行動及び日常生活を規律化しようとしていた。つまり、労働運動は、その団体生活全体において、「リスペクタブル」な労働者を養成せんとしていたのである²⁸⁾。このような団体生活の形成は、一つには、労働運動が、使用者に対抗してできるだけ効率的かつ合理的に権力資源を動員してゆこうと努力していたことから説明されるであろう。

一方、労働運動は、集会所である「人民の家 (folkets hus)」や「人民の公園 (folkets park)」など独自の空間を構築していた。これらの労働運動の公共的空間は、単に労働運動や労働者の集会所であることに留まらず、地域社会の公共的な施設たらんとする志向性を持っていた。例えば、「人民の公園」は、様々な催し物を行い、地域住民を引きつけたのである。実際、労働者図書館や「人民の公園」の多くが、戦間期以後、地方自治体であるコミューンの施設となり、名実ともに地域社会の文化的中心となってゆく。このような公共的空間が開放的である団体生活の形成は、禁酒運動や自由教会運動と密接な関係を持ち、「国民運動」として労働運動が展開したことに代表されるように、労働者階級と中間層（直接には下層中間層）が様々な形で交流していたことと相互的に展開していったものと考

えられる。また、このような労働運動の公共的な空間の開放性は、労働者が「議論する公衆」として認められることを積極的に求めてゆくこととつながっていた。そして、労働者が自分達は「議論する公衆」であると自負することは、日常生活のあらゆる局面における「リスペクタブル」な行動様式に支えられていたと思われるのである²⁹⁾。

このように「リスペクタビリティ」への志向は、労働者が市民的公共性に積極的に参加しようとする意志と結びついていた。つまり、「リスペクタブル」な労働者の生成は、労働者の使用者に対抗しての権力資源の動員過程のみではなく、地域社会における様々な形での労働者階級と中間層との交錯という視点からも見てゆかねばならないのであり、「リスペクタビリティ」とは、職場での労働者の地位の向上にとどまらず、市民的公共性の場において都市支配層（上層中間層）のヘゲモニーに挑戦しようとする戦略でもあったと考えられるのである³⁰⁾。

ところで、こうした「リスペクタブル」な労働者文化の生成を、果たして労働者のブルジョワ化 (förborgerligande) と捉えるべきか否かが問題となっている。例えば、そうした移行に対する外在的要因を重視するホリビイの処女作においては、それをブルジョワ化と見なす傾向が強い。そしてそこでは、労働者の規律化は、集権的な団体交渉システムに代表される階級闘争の制度化、いわば、労働者の体制内化につながるものであると考えられている³¹⁾。また、別の論文では、労働者の

29) 同稿、第4節③を参照。

30) 中間層 (medelklass), 上層中間層 (högre medelklass), 下層中間層 (lägre medelklass) の概念については、拙稿「19世紀スウェーデン社会と労働組合運動」『歴史学研究』第626号、1991年を参照。本稿では、以上のような中間層を担い手として生成・展開した文化を市民文化と呼ぶこととする。

31) B. Horgby, *Den disciplinerade arbe-*

28) 拙稿「日常生活」、第4節②を参照。

「リスペクタビリティ」を市民的な価値観・行動様式を取り入れたものだと見なしている³²⁾。このように労働者のブルジョワ化が論じられる時には、労働者の体制内化と労働者への市民文化の浸透という二つの問題が論じられていると思われる。

民族学において、市民文化の浸透という観点から労働者のブルジョワ化を強調する研究を代表するのは、フリユクマンとレーフグレンの著作であろう。彼らは、階級間の文化の交錯を問題とし、市民文化の農民や労働者への浸透を様々な角度から例証した。自然観、家族観、罪、性、肉体に対する感覚等々である³³⁾。その他、民族学では、例えばブーマンの労働運動における歌の研究でこうしたブルジョワ化が論じられた。彼は、労働運動の中でどのような歌が如何なる場で歌われ、それがどのように位置づけられたのかを問題にしたのである。彼によれば、初期の労働運動内部では、アウグスト・パルム(August Palm)に代表される手工業熟練労働者の文化とブランティン(Hjarmar Branting)に代表される学生出身者の文化が対抗していた。前者では、歌は、労働者の団結の力を誇示し、アイデンティティを強化するものとして位置づけられていた。そして、あくまで労働者階級の階級意識の表現としての歌が求められたのである。それに対し、後者では、音楽を含め芸術はあくまで階級中立的であって、集団としてのアイデンティティを確立するというより個人的な情操を高め、個人としての技芸を競うものだと位置づけられていた。そして彼によれば、

労働運動には、後者によってそうした市民的な芸術観や慣行が持ち込まれ、浸透していったのである³⁴⁾。

このようなブルジョワ化を強調する研究に対して、単純なブルジョワ化を否定する一連の研究が存在する。それらの研究に共通する特徴は、「リスペクタブル」な労働者文化への移行の内発的・主観的な要因を重視していることである。例えば、アンビヨンソンやマグヌソンは、こうした「リスペクタブル」な労働者文化への移行には、確かに使用者や都市支配層の利害に沿う側面も存在したのであるが、少なくとも労働者の主観的意図はそれとは異なっていたという両面性を指摘している。彼らによれば、工業化に伴う社会の規律化・合理化の中で、そうした「リスペクタブル」な生活様式を受容は、階級としての経済的・社会的・政治的・文化的向上の前提となっていた。このような状況の中で、労働者は、「リスペクタビリティ」を志向することで、階級としての労働者の地位の向上とともに、工場の内と外におけるパターナルな支配の打破を目指したのである。しかし、そうした労働者の主体的な行動は、使用者や都市支配層のヘゲモニーに対する挑戦であったと同時に、新しい工場の規律の形成にもつながっていた。彼らは、このように労働者の主観的な意図と客観的な帰結の両面性、パラドックスを強調するのである³⁵⁾。

鉄道を中心に新しく開けた町である南スコネ(Skåne)のスヴェーダラ(Svedala)における労働者文化を研究した民族学者リンドクヴィストも、単純なブルジョワ化を否定

taren, s. 246-248.

32) B.Horgby, "Tradition och förändring i arbetarkulturen", s. 304. しかし彼は、最近では単純なブルジョワ化を否定している。B.Horgby, *Egensinne och skötsamhet*, s. 284-290.

33) J.Frykman/O.Löfgren, *Den kultiverade människan*, Lund 1979.

34) S.Bohman, *Arbetarkultur och kultiverade arbetare*, Stockholm 1985.

35) R.Ambjörnsson, a.a., s. 261-262 ; L.Magnusson, "När fackföreningen utmanade fabriken", s. 459; Dens., *Arbetet vid en svensk verkstad: Munktel 1900-1920*, Malmö 1987, s. 243.

する。例えば、彼は、労働者の間で使われる "skitherrskap (似而非紳士)", "herrska-pfasoner (ご主人のマナー)" といった言葉に注目し、労働者は確かに都市支配層である上層中間層の生活様式に憧れを抱いていたが、その一方で、自分の手を汚して働かず他人からの搾取で生活することに対する自らの価値観に基づく強烈な批判が存在していたことを示した。ブルジョワ婦人は何もしないことで馬鹿にされていたのであり、それに対して「リスペクタブル」な労働者の婦人は家事や育児を一切一人できりまわすことで称賛されるべき存在であったのである。このように彼は、労働者と商人の間の紛争、自然観の差、街路や広場での行動様式の差など様々な角度から労働者の「リスペクティビティ」と市民文化の衝突を論じた³⁶⁾。彼は、こうして労働者に市民文化が浸透してゆくというよりも、労働者が主体的に文化を創造してゆく側面を強調する。即ち、労働者は、市民文化に対し、このように自己にとってふさわしくないものはけって取り入れなかったのであり、その一方で資本主義システムの抑圧に対抗して様々な戦略、制度を生み出していったのであった。そうした中で強力な組織の形成が、使用者や都市支配層の支配を打破する前提として進行してくるのである。その一つの帰結が、労働者の規律化であり、「リスペクタブル」な労働者の形成であった³⁷⁾。

このような労働者の主観的な意図を重視することは、イエーテボリイのパン職人における階級意識の形成を論じたスカーリン・フリユクマンにも共通している。彼女の整理に従えば、使用者や都市支配層が労働者を規律化しようとする意図は、保守的で、ヒエラルヒシユな社会秩序や財産秩序を維持しようとするものであり、その規律化は、あくまでも個

人が対象となる個人主義的な性格を持っていた。それに対し、労働者が自ら規律化を求める意図は、何より社会改革的で、財産や教育機会など社会的資源の再分配を求め平等な社会秩序を実現しようとするものであり、その規律化は、労働者の連帯によって集団あるいは階級としての向上を目指すコレクティヴな性格を持つのであった³⁸⁾。

こうして労働者の単純なブルジョワ化を否定する研究は、「リスペクタブル」な労働者文化への移行が、必ずしも労働者の体制内への統合を意味せず、使用者や都市支配層の工場の内や外における支配を打破せんとする側面を持っていたことを示したのである。また実際、労働者文化は、リンドクヴィストの強調するように、市民文化の価値観や生活様式を部分的に受容したとしても、それとは異なる独自性を有していた。つまり、労働者の側で市民文化の諸要素に対する取捨選択が行われたのである。このことは、客観的な状況に対応しての労働者の主観的な意図が働いたことを示すと思われる。このような主観的な意図の重視は、その客観的な帰結が最終的にどうなったのかをめぐる評価は別としても、労働者階級の形成をプロセスとして問題にする場合には不可欠な視点となるだろう。また、社会の規律化に対する労働者側の主体的な対応としての「リスペクタブル」な行動様式の採用が、逆に使用者や都市支配層の側での新

38) B.Skarin Frykman, *Från yrkesfamilj till klassgemenskap*, Göteborg 1987, s. 295. 彼女はまた、1880年代の建築労働者ヨハン (Johan) の日記を分析し、彼が禁酒をして規律だった生活様式を身につけるに至ったのは、ブルジョワ化によるのではなく、労働者が自己の人間の価値の承認を望み、他の社会階級との社会的地位の平等を求めたからであったと主張している。B.Skarin Frykman, "Dryckande och disciplin - protest mot ett förborgerligande", i: *Lönearbete och livsmönster*, Kungälv 1989.

36) M.Lindkvist, a. a., s. 142-162.

37) Ibid., s. 169-170.

たな対応を生み出し、市民社会の変容を促していったと思われる。様々な研究で指摘される工場や地域社会における旧来のパターン的な支配の解体がそれに当たるであろう。我々は、こうした労働者の主観的な意図を重視しつつ、労働者階級の形成を市民社会・市民文化との間の吸引と反発の相互的なプロセスと

して捉えてゆく必要があると考える³⁹⁾。

(4) 「頑迷」な労働者と日常生活

アンビオンソンは、「リスペクタブル」な労働者が両面戦争を行っていたことを指摘する。即ち、一方では使用者に対してその工場の内と外での支配を打破することを目指し、他方では運動の組織活動にとって害のある者に対し、それを統制せんとしていた⁴⁰⁾。リンドクヴィストも、「リスペクタブル」な労働者家族は、ブルジョワジーとも伝統的な生活様式を引きずっている恒常的な仕事につかない貧しい労働者とも一線を画していたのであり、特に後者とは交際しない傾向にあったことを指摘している⁴¹⁾。このような「リスペクタブル」な労働者による「頑迷な」労働者の抑圧は、マグヌッソンも言及しており、機械工の労働組合では、様々な規律化の取り組みがなされていたことが触れられている。飲酒

39) いわゆる習俗の文明化の過程を、上位の者に対する同化と、下位の者に対する差異化の過程として捉え、それを絶対王制における身分的・階層的秩序の形成・展開に結びつけて論じたものとして次の書物を参照。N. エリアス (赤井慧爾他訳)『文明化の過程』(下) 法政大学出版局 1978年, 432-479頁 ; R. ミュッシュンブレッド (石井洋二郎訳)『近代人の誕生—フランス民衆社会と習俗の文明化』筑摩書房 1992年, 143-212頁。これらの書物と本稿で示した視角の差は、まず第一に、彼らが社会の規律化を特に同化と差異化のメカニズムから説明することに関連する。そのメカニズムは、人間の羞恥心や優越感などに注目するもので、それのみで、外面的規律から内面的な規律への移行がうまく説明できるのかという疑問がある。規律に従う従わないということには、より積極的な動機づけが存在したのではないかと思われるのである。というのも、彼らの議論では、民衆あるいは労働者はむしろ規律化される客体であり、ここで問題とした労働者の「リスペクタビリティ」の志向に見られる労働者の主体性を、評価できなくなるのではと考えるのである。そもそも労働者には、「リスペクタビリティ」を求めた労働者ばかりではなく、「頑迷さ」を強固に示す労働者も存在したのである。これに関連して第二に、彼らは、規律をめぐる階級間の対抗関係をなお一面的にしか捉えていないと思われることである。例えば、確かに労働者の「リスペクタビリティ」への志向は、労使間の階級的対立という状況ぬきでは理解できないのであるが、彼らの議論では、そうした階級間・階層間の対立が規律の質的変化と結びつく傾向にあったことが視野に入りくいのである。エリアス自身も指摘しているように、ドイツにおいては貴族・宮廷に対する市民層の対抗関係が存在したのであり、ドイツにおける教養 (Bildung) 理念はそこから生成してきたと考えられる。N. エリアス 前掲書 (上) 法政大学出版局 1977年, 74-80頁。また、M. ウェーバーが問題にしたイ

ギリスの禁欲のプロテスタンティズムは、絶対王制を打倒する主体を生み出したのであった。M. ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(大塚久雄) 岩波文庫 1988年。このように、階級間の対立と規律のあり方の質的な転換は、しばしば密接に関連していたのであり、彼らの把握では、あたかも社会の規律化が、絶対王制の宮廷から社会の下層への単純な浸透過程と見なされてしまう危険があると思われるのである。このように、規律化される側の主体性をより積極的に評価し、階級・階層間の相互関係の中で各自が規律に対してどのような意味付けをしていったのかを検討することで社会の規律化の過程をよりダイナミックに捉えられるようになるのではないかと考える。なお、スウェーデン市民社会における階級・階層間の相互関係の中で、教養 (bildning) 理念が質的変化を伴いつつ如何に展開していったかを概観する試みとして、拙稿「スウェーデン社会民主主義における教養理念の展開 (上)(中)(下)」(東京大学)『社会科学研究』第46巻 第3, 4, 5号, 1994-1995年を参照。

40) R. Ambjörnsson, a. a., s. 261.

41) M. Lindkvist, a. a., s. 170.

の他、集会に遅刻することなどの不品行は、労働組合の中での取り締まりや罰則の対象となったのである。これは、彼によれば、労働組合の権力資源の強化のためであった⁴²⁾。これらの指摘は、「始末に負えない」民衆文化から「リスペクタブル」な労働者文化への移行は、「リスペクタビリティ」を求める労働者の自己意識が高まり、彼らが、なお伝統的な生活様式・行動様式を保持する他の労働者と自分たちとの差異を強調してゆく過程でもあったことを示していると思われる。「リスペクタブル」な労働者文化への移行は、こうして「頑迷な」労働者文化の生成も伴っていたのである。

では、このように「頑迷な」労働者は、「リスペクタブル」な労働者の抑圧を受けることとなったのだが、彼らは果たしてどのような日常生活を送っていたのであり、「頑迷な」労働者文化とはどのようなものであったのであろうか。「頑迷な」労働者についての本格的な研究は、管見の限りまだ数少ないが、言及されるべきだと思われるのが、フランセーンの研究とホリビィの最新作である。フランセーンが、自身の戦間期ストックホルムのセーデル地区の研究を基にして、アンビョンソンが問題とした「リスペクタブル」な労働者に対し「頑迷な」労働者の概念を提唱したことは前述の通りである。確かにこの研究が主に対象としているのは、労働者階級形成期より後のことである。しかし、「頑迷な」労働者とはどのようなものであったのかを見る上では無視できない研究だと思われる。一方、ホリビィのこの著作は、次項でも取りあげることとなるが、やはりノルシェーピングの労働者を対象とし、そこでの労働者文化の生成・展開を、19世紀半ばから1940年頃までについて「リスペクタビリティ」と「頑迷さ」をキーワードとして捉えようとしたものである。そ

42) L.Magnusson, *Arbetet vid en svensk verkstad*, s. 235-239.

れ故、その研究には、具体的な叙述は豊富とは言えないが、「リスペクタブル」な労働者のそれと比較しつつ、「頑迷な」労働者の日常生活の分析も含まれるのである。また、その際彼が、その全体像を解明するに至っていないが、職場のみではなく、地域社会、家庭といった日常生活の場をも視野に収めていたことも注目される。

フランセーンの対象としたセーデル地区の住民の約3分の2は、都市下層民 (folkliga klasser—下層中間層と労働者) であった。そうした労働者のうちの大多数は、雑多な職業を転々とする建築現場や港湾で働く屋外不熟練労働者であり、季節的な失業はつきもので、そのうえ景気循環の影響を最も敏感に受けていた。また、下層中間層の主要部分を占める自営業者も、所得が不安定で貧しい暮らしを営んでいた⁴³⁾。ホリビィが、ノルシェーピングで「頑迷な」労働者を代表すると考えたのも、労働組合成立期の手工業熟練労働者とともに、こうした生活が安定しない屋外不熟練労働者であった⁴⁴⁾。フランセーンは、このような地区を対象とすることで、ロンドンのイースト・エンドにも通ずる都市下層民の民衆文化をスウェーデンにおいて見いだそうとしたのであった。ただし、彼が、工業化前には都市が未発達で、人口の殆どが農村に住んでいたスウェーデンにおいては、そのような都市下層民が集まって住む場所は珍しく、このようにそうした人々が担う都市民衆文化の伝統が見られる場所は、多くは存在していなかったと指摘していることは留意されるべきであろう⁴⁵⁾。

ところで、このセーデル地区の住民の「頑

43) M.Franzén, *Den folkliga staden*, s. 129-131.

44) B.Horgby, *Egensinne och skötsamhet*, s.95.

45) M.Franzén, *Den folkliga staden*, s. 51-52.

迷な」生活は、ビール酒場 (ölkafé) での喧嘩に代表される。スウェーデンにおいては、1917年からアルコールの販売規制が行われてた。いわゆるブラット・システム (Bratt-system) の導入である。それによってアルコール濫用で捕まった経験を持つ者はもとより、きちんとした住居や収入のない者もアルコールを購入できないこととなった。例えば、救貧を受けている者や、親元で生活している息子や娘、他人の家に寄宿している者には、それを提示することでアルコールが購入できる飲酒手帳 (motbok) が発行されなかったのである⁴⁶⁾。この地区には、特にこうした飲酒手帳を持っていない人々が多かった。そしてビール酒場と言えば、当局の許可と監視の下ではあるが、そうした飲酒手帳を持たぬ者でも合法的に酒を飲める場所であったのである。ここは、酔っ払いがしばしば騒ぎを起し、些細なことからすぐ喧嘩ざたとなる所でもあった。それ故、警察官は、何か事件があるところの場所に目をつけ、パトロールにおいては必ずチェックしていたのである⁴⁷⁾。

ホリビィも、ノルシェーピングにおける屋外不熟練労働者を中心とした「頑迷な」労働者の飲酒文化について言及している。ここでは、酒場での蒸留酒のおごりあいが社会的帰属を象徴し、おごりおごられることを拒否すれば、相手の名誉を傷つけることとなり、しばしば殴り合いにつながっていた⁴⁸⁾。このように、「頑迷な」労働者文化においては、マグヌッソンの言う「始末に負えない」文化の諸要素が多く継承されていたのである。

さらに、セーデル地区の住民の中には、こ

うしたビール酒場での飲酒に満足できず、非合法的な蒸留酒取引 (langning) に手を出す者もいた。当局は、これを必死に取り締まろうとしたが、住民からこれについての証言を取ることは難しかった。彼らにとって、そうした行為は決して非道徳的なものではなく、むしろブラット・システムの導入こそが正統性を持たないことであったのである⁴⁹⁾。

一方、このような飲酒は、彼らの収入が不安定であることと結びついていた。仕事に常によりつけるわけではなく、明日のことは明日にならねばわからぬ状況が、貯金を無意味に思わせ、宵越しの金を持たないその日暮しの生活を助長したのである。そうした生活の不安定さは、彼らがよく引っ越しをしたことにも反映されていた⁵⁰⁾。彼らは、ホリビィの枠組に従えば、著しく生活の計画パースペクティヴが短かったと言えよう。そしてさらにそうした生活がエスカレートする場合には、酒に溺れ、妻や子供に乱暴を働き、コミューンの禁酒委員会 (Nykterhetsnämnden) や児童福祉委員会 (Barnavårdsnämnden) の活動の対象となることとなった。これらの委員会は、こうした酔っ払いの夫 (あるいは妻)、時には身持ちの悪い母親のいる家庭生活に介入し、家庭の崩壊を防ぐことを役目としたのである⁵¹⁾。

このように、「頑迷な」労働者とは、「リスベクタブル」な労働者とは対照的な、酒飲みで、粗野で、自己統御できずに感情をすぐ露にし、乱暴をふるい、宵越しの金を持たない短期的な生活の計画パースペクティヴで特徴づけられる労働者であった。では、戦間期に至っても、伝統的な生活様式に固執するこのような労働者が再生産される基盤とは何であったのであろうか。

46) Ibid., s. 265-266.

47) Ibid., s. 267.

48) B.Horgby, *Egensinne och skötsamhet*, s.163-164. ノルシェーピングの特に労働者の飲酒とそれに対する当局のアルコール政策の推移については、Dens., *Surbullestan*, Stockholm 1989, s.276-282 を参照。

49) M.Franzén, *Den folkliga staden*, s. 291-292, 298.

50) Ibid., s. 178-179.

51) Ibid., s. 304-305, 321-338.

こうした「頑迷な」労働者の再生産の基盤として、やはり家庭や地域社会、職場を考える必要がある。例えば、両者が指摘するように、このような労働者の、あるいは彼が育った家庭では、父親がしばしば不在であり、家庭内でのいざこざが絶えず、頻繁に暴力がふるわれていた⁵²⁾。離婚に至るケースも少なくなかったと言う。ストックホルムのセーデル地区では、離婚した単身の女性の家計が多く存在したのである⁵³⁾。ホリビィによれば、このような家庭環境は、子供に性的役割を歪んで植えつけ、子供がやたらに攻撃的となることを促すものであった。そして、子供のしつけは、むしろその場限りでおとなしくさせることを目的とした、強権的・威圧的な性格をもっていた⁵⁴⁾。これに対し、「リスペクタブル」な家庭は、父親が一家の生計をしっかりと担い、そこででのしつけは、そのようにやたらに暴力を奮うものではなく、子供を諭して徐々に内面的な規律を養成してゆくことを志向していた⁵⁵⁾。「頑迷な」労働者の子供には、こうした家庭における規律の内面化の契機が欠けていたのである。

また、ストックホルムのセーデル地区の子供達は、自分のアパートの中庭やアパートのある通りを中心に遊び、そこで仲間を形成していた。これらの子供達には、家庭でのコントロールが及ばず、子供達は、殆ど野放しの状態のまま悪さを繰り返していた。例えば、窃盗などもこれに含まれる。こうした子供の集団が長じて愚連隊 (ligor) となるケース

も存在した⁵⁶⁾。

このような子供達は、多くの場合、小学校を出ると職についた。しかし、その殆どが、小使い (springsjasen) と呼ばれるもので、一生その職に就いていることはできなかった。それ故、彼らは、ある程度の年齢となると、工場労働者となったり、徒弟となって手に職をつけようとしたのである。しかし、多くの者が、こうした定職になかなか就くことができず、やはり屋外不熟練労働者として雑多な仕事を不定期にこなして糊口をしのいでゆくことを余儀なくされた。こうした不安定で、季節的な失業に加え、景気循環に最も敏感に左右され、将来の見通しは立たないといった彼らの職業自体が、生活の計画パースペクティブの長期化を妨げていたであろうことは言うまでもない⁵⁷⁾。

さらにこのような職業における人間関係、即ち、労働者の集合性の性格自体も、「頑迷な」ものであった。例えば、セーデル地区に住む建築労働者 (セメント労働者) であるエリック・ミュルマン (Erik Myrman) は、1915年から1935年の間に、酩酊で37回捕まったのであった。しかし世間一般から白眼視されていた彼は、仕事仲間からは親しまれ、尊敬され、いつも仲間と囲まれて食事し談笑していたのである。飲酒は、そうした仲間との生活の一部であった⁵⁸⁾。

一方、労働運動の団体生活は、先のエスキルストウーナの事例のみではなく、ホリビィも指摘するように、基本的には「リスペクタブル」なもの、あるいはそれを志向する存在であった⁵⁹⁾。けれども若者の余暇においては、そうした労働運動の団体生活とは別に若者同

52) Ibid., s. 133-134, 171-180, 331-338 ; B. Horgby, *Egensinne och skötsamhet*, s. 109-113, 129, 323-327.

53) M. Franzén, *Den folkliga staden*, s. 135.

54) B. Horgby, *Egensinne och skötsamhet*, s. 129-134.

55) Ibid., s. 120-128, 368. 同様の指摘をしたものとして、H. Brembeck, *Arbetsradsdelarnas barn*, Göteborg 1988, s. 37 を参照。

56) M. Franzén, *Den folkliga staden*, s. 197-203, 208, 354-358.

57) Ibid., s. 220-226.

58) Ibid., s. 313-314.

59) B. Horgby, *Egensinne och skötsamhet*, s. 362, 367, 369.

士の付き合いが存在した。フランセーンによれば、そのような付き合いとは具体的には、アパートの階段でおしゃべりをするとか、町をうろつくとか、映画をみたり、サッカーの試合を見たりすることであったのだが、その代表的なものが、ダンスであった。戦間期のストックホルムには、たくさんのダンス場が設立され、若者のエネルギー発散の場として、男女交際の場として繁盛していた。そこでの娯楽は、規律化された身体とは対極の位置にあったと言う⁶⁰⁾。

とはいえ、それ以前に比して戦間期においては、このような「頑迷な」労働者の生活あるいは行動様式には、変化が現れていた。例えば、フランセーンによれば、これらの労働者にとって飲酒はすぐれて余暇のこととなっており、ビール酒場は平日の夜は閑散としていて、労働者が集まって馬鹿騒ぎをするのは金曜日から日曜日の夜のことであったのである⁶¹⁾。その意味で、労働と余暇の分離は実現されていた。また、ホリビィは、ノルシェーピングの「頑迷な」労働者について、その抵抗の形態が、あからさまに規律に反抗することは少なくなり、表向きはそれに従いつつも、様々な形でそれを回避せんとする形態が主流になっていったことを指摘している⁶²⁾。そして、彼らの多くは、第一次大戦以前には、景気循環に応じ、自分の都合に合わせて労働組

合への加盟・脱退を繰り返していたのだが、戦間期には、労組の恒常的なメンバーとなっていたと言う。ただし、彼らは、普段は積極的には組合の活動に関わらなかったが、使用者との間に対立が深まり争議が起こりそうになる時に限り、にわかには活気づくといった傾向が見られたことが指摘されている⁶³⁾。

このような変化は、まず第一に、戦間期には合理的労務管理の導入が進んだことなどに見られるように、使用者のコントロールが一層強化され、規律化の圧力が強まっていった状況に原因が求められるであろう⁶⁴⁾。また、労働者が労働組合により深く関わってゆくなかで、その団体生活に大きく影響を受けるようになったことも考えられる。そしてこの時期には、コミューンの禁酒委員会や児童福祉委員会の活動に代表されるように、国家の労働者の私生活への介入が進展したことも考慮に入れるべきであろう⁶⁵⁾。なお、戦間期には

63) B.Horgby, *Egensinne och skötsamhet*, s. 416. オーマルクも戦間期の労組の組織率の上昇と関連して同様の指摘をしている。K.Å mark, *Facklig makt och fackligt medlemskap*, Lund 1986, s. 158-159, 171. なお、フランセーンは、労働組合のメンバーとなっていることが、ストックホルムのセーデル地区とロンドンのイースト・エンドとの差であるとしている。M.Franzén, *Den folkliga staden*, s. 382.

64) 世紀転換期スウェーデンにおける合理的労務管理の普及については、とりあえず、合理化運動の進展という観点からこの問題を扱った、H. De Geer, *Rationaliseringsrörelse i Sverige*, Uddevalla 1978 を参照。ノルシェーピングの繊維工業については、B.Horyby, *Egensinne och skötsamhet*, s.402-407 が概観している。

65) 戦間期福祉国家の生成に伴い、科学的理性に基づき人間生活における様々な災いを取り除こうと、国家による私生活への介入が進展する。こうした問題を扱ったものとして、Y.Hirdman, *Att lägga livet till rätta*, Stockholm 1989 を参照。

60) M.Franzén, *Den folkliga staden*, s. 233-234, 243-244. ホリビィも、戦間期の「頑迷な」労働者文化の変質に関連して、ダンスの流行に見られるような大衆文化の影響を指摘している。B.Horgby, *Egensinne och skötsamhet*, s. 329-332.

61) M.Franzén, *Den folkliga staden*, s. 274.

62) こうした変化を、ホリビィは、公然たる反抗の戦略 (frotsande strategi または prälände strategi) から回避戦略 (smittningsstrategi) への労働者の戦略の変化として捉えている。B.Horgby, *Egensinne och skötsamhet*, s. 303-312.

高失業率を克服できなかったのだが、1932年の社会民主党政権成立以後の福祉国家の生成・展開に伴い、こうした私生活への国家の介入が進むと共に、労働者の生活が安定していったことにも留意すべきと考える。さらに、映画産業の勃興に見られる大衆文化の生成は、娯楽を、それまで支配的であったビール酒場などでの仲間うちでの集団的な形態から、次第に個別化した形態のものが主流となってゆくことにつながった⁶⁶⁾。このことは、「頑迷な」労働者同士の結びつきを弱めていったと思われる。このように、「頑迷な」労働者の再生産を支えていた日常生活（職場、地域社会、家庭）の基盤が縮小し変質してきたのであり、そのことが、「頑迷な」労働者の性格の変化をもたらしたと考えられるのである。

先に触れたように、「頑迷な」労働者についての研究は余り進展していない。今後、こうした労働者の再生産を支えていた日常生活のあり方に注目しつつ、「リスペクタブル」な労働者文化の生成と並ぶ労働者階級の形成のもう一つの側面である「始末に負えない」民衆文化から「頑迷な」労働者文化への移行を捉えてゆくべきであろう。その際、「頑迷な」労働者が社会の規律化にどのように主体的に対応していったのかに注目すると同時に、それに伴う「頑迷さ」の質的变化やそうした対応が「リスペクタブル」な労働者に与えた影響を見てゆく必要があると思われる。

(5) 「リスペクタビリティ」と労働者

ここでは、前節で用いた手工業熟練労働者、工場熟練労働者、工場不熟練労働者、屋外不熟練労働者といった労働者の分類を念頭におき、前項でも問題にしたホリビィの最新作と

先に触れたリンドクヴィストの研究に主として拠りつつ、それぞれの種類の労働者において「リスペクタビリティ」あるいは「頑迷さ」が、どのように現れたのかを見ておきたい。

まずホリビィのノルシェーピングの労働者文化の研究によれば、手工業熟練労働者は、使用者との関係において熟練に基づき強い自律性を持ち、伝統的な文化を維持し続け、「頑迷な」傾向が強かった。しかし、労働組合の活動に熱心で団体生活に積極的に参加する者は、「リスペクタブル」な性格を持つようになってゆく。それに対し、最も規律化が進んだ労働者は繊維工場の不熟練労働者で、その過程は、彼らの生産点での地位の弱さに起因する他律的な規律化と見なされる。しかし同じ不熟練労働者でも屋外不熟練労働者では、規律化は進まなかった。というも、彼らは、確かに熟練を持たず労働者の代替可能性が高く使用者に対し弱い立場にあったのであるが、移動性に富み、その労使関係は極めて流動的なものであったのである。また、その不安定な就業が、生活の計画パースペクティヴの長期化を妨げていたことも留意すべきであろう。一方、女性の労働者は、大きく言って2つに分かれ、ブルジョワ家庭で働く奉公人や工場不熟練労働者でもある程度の熟練が必要な職種につき両親の家庭に同居するような場合には、規律化が進み、多くは「リスペクタブル」な性格を持つようになった。しかし、規律化されず「頑迷さ」を強く示す女性労働者も存在した。彼女らは、工場不熟練労働者で、前者よりも熟練を必要としない職種につき、多くが未婚者で私生児だったと言う⁶⁷⁾。そして、特に繊維工場の女性労働者は、かえって一層「頑迷」の傾向を強めたのであるが、それには、機械化や分業が進んで熟練が平準化していったのにもかかわらず、男子

66) 勿論、大衆文化は「頑迷な」労働者にだけ影響を与えていたのではなかった。その労働運動の団体生活への影響については、とりあえず、S.Jansson, *Förening och gemenskap*, Malmö, s. 113-114 を参照。

67) B.Horgby, *Egensinne och skötsamhet*, s. 71-89, 486-487.

労働者が「リスペクタビリティ」を誇示し、労組活動で女性を排除するなど特権的で排他的な地位を確保せんとしていたことに彼女らが反発したという背景も存在した⁶⁸⁾。

もう一つのリンドクヴィストの研究は、先にも言及した南スコネのスヴェーダラにおける、19世紀末から第一次大戦期までの労働者文化を扱ったものである。具体的には、機械工場の鍛造工、鉄労働者 (järnarbetare)、砂糖工場の不熟練労働者を対象とした。

そこでは鍛造工は、鉄労働者とは別に労働組合を形成していたが、これは、ギルド的な伝統を継承した独特な職業文化を持っていたためだと推定された。鍛造工は、手工業的熟練に基づき生産過程において大きな自律性を保持しており、「神の次には何も来ず、その次にも何も来ない。しかし、その次には鍛造工が来る」といった特権意識を有していた。そして職業でのキャリアに応じたヒエラルヒーを持ち、徒弟は、3年以上の職業における訓練を経なければ労働組合に入れなかった。実際、ギルド的な慣行を継承し、例えば、そうして一人前の職業労働者 (yrkesman) となった者に対して儀式が行われていた。また、彼らの社会観においては、そうした職業のヒエラルヒーの頂点に親方 (使用者) が位置づけられていた。それ故、彼らは、使用者に関しては、同じ職業を営む者としての連帯意識と同時に、階級的利害の対立を認識するといったアンビヴァレントな感情を抱いていたという。一方彼らが1890年に設立した労働組合は、機械化、労働力の供給の増加によって脅かされた特権の擁護をその目的としていた。そのため闘争の矛先は、使用者とともに自分達以外の他の労働者にも向けられていたのである。こうした鍛造工は、いわば工場の中の手工業熟練労働者と性格づけられるだろう。その労働組合は、職業保護主義の特徴を示していた

のである。しかし、鍛造工は、このように伝統的な生活習慣を保持していたが、組織活動を進めるに従い、漸次「リスペクタブル」となっていたと言う⁶⁹⁾。

これに対し、鉄労働者には、ギルドの伝統はなく決まった職業教育もなかった。その職業教育は、先輩である熟練労働者の助手を務めるという形で行われたが、鍛造工と異なり年を取った者でも助手になれた。また、助手との間の身分的な格差は、鍛造工のようにはっきりしておらず、一人前の労働者となったことを示す儀式などはなかった。こうした熟練形成のあり方を反映して、その1895年に成立した労働組合も開放性を特徴としていた。この労働組合は、鍛造工と木材加工業の労組に組織された木型労働者以外の工場におけるすべての職種の労働者を統合しようとしていたのである。助手でも労組に参加しえた。鉄労働者とは実はそうした不定形な工場熟練労働者の総称であった。それ故、彼らは、長い訓練期間を経験し、そうしてやっと熟練を獲得したことで職業に対する誇りも持っていたが、そのように一人前となる前の底辺部分では、不熟練労働者との距離は殆どなかったのである。その労働組合は、鍛造工の労組とは異なり、なるべく多くの者を組織しようとしていた。そしてさらに、規律と秩序を示すことで、使用者に一目置かれる存在となり、自分たちの地位を向上させてゆくことを目指していた。それ故、この鉄労働者が最も「リスペクタブル」な性格を示すこととなる⁷⁰⁾。

最後の砂糖工場の不熟練労働者には、職業教育などはなく、その間でのランクは、主に肉体的頑強さに拠っていた。この労働者の特徴は、雑種性であり、多くは近郊に住む農民で、季節労働をしにこの町にやってくるのであった。そのため職業の誇りなどはなく、与

68) Ibid., s.143, 485-486.

69) M.Lindkvist, a.a., s. 49-82, 164-165.

70) Ibid., s. 83-90, 166.

えられた仕事は何でもやったのである。ここでは工場の不熟練労働者と屋外の不熟練労働者の労働市場は共通であり、相互に流動的であったのであるが、この町の様々な工場や屋外の不熟練労働者の中でも砂糖工場の労働者は、年間を通じて安定した仕事を得られる恵まれた上層部分に当たった。それ故、1897年に設立された不熟練労働者の労働組合は、工場と屋外の不熟練労働者の労働市場の共通性を背景に、両者が同じ組織に団結する一般労働組合の形態を取ったのであるが、そこでは、こうした上層部分の砂糖工場の労働者と他の下層部分の不熟練労働者との対立が見られたという。そして労働組合は、このような労働者の移動性・雑種性を背景として、メンバーが出会い交際する結節点とはならず、その団体生活は発達しなかった。労働組合は、すぐれて賃金闘争組織であることにとどまったのである。多くのメンバーは、一年の一定期間のみ労働者であるだけであり、メンバー間のアイデンティティは極めて弱いものであった。彼らにとっては、ただその時々により己の労働力が高く売ればそれでよかったのである。こうしたメンタリティに対応して、彼らのストライキは組織的には未発達であったが、一斉の職場放棄など突発的で急進的であった。こうした不熟練労働者は、労組の指導者など少数の者を除き、「リスペクタビリティ」を求めなかったという⁷¹⁾。

このような二人の研究から、以下のような傾向が読み取れるであろう。

まず手工業熟練労働者は、生産の場において強固に自律性を保ち、前工業化期の手工業文化以来の伝統的な価値・規範あるいはそれに基づく社会的な関係を維持しようとしていた。それ故、「リスペクタビリティ」よりも「頑迷さ」を示す傾向にあった。しかし、両者が指摘するように、「リスペクタブル」な

労働者が存在し、組織活動の経験を積むに従い、この範疇の労働者の「リスペクタブル」な側面は強まっていった。

次に工場熟練労働者は、熟練に基づき生産過程において大きな自律性を持ち社会的な地位も高かったが、手工業熟練労働者のような伝統は持たず、その組織は閉鎖的ではなかった。そして社会の規律化・合理化に最も積極的に対応し、「リスペクタビリティ」を最も強く示していた。先に触れたエスキルストーナの労働運動の中核をなしたのは、この範疇に属す金属・機械工業の労働者であった⁷²⁾。

工場不熟練労働者は、雑多な出自を持ち、伝統を持たず、職場における使用者に対する発言力も弱かった。ホリビィによれば、この種類の労働者ではむしろ他律的に規律化が進むこととなる⁷³⁾。

屋外不熟練労働者は、労働力の代替可能性が大きく職場における発言力は弱かったが、移動性を持ち、固定した労使関係の下にはなく、使用者による他律的な規律化は進み難かった。それ故、「頑迷さ」を強く示すこととなる。フランセーの研究が対象とした「頑迷な」労働者は、主にこの範疇に属すであろう。また一般に、彼らの就業の不安定さは、生活の計画パースペクティブの長期化を妨げ、労働運動において安定した団体生活を構築するのを困難にしたのである。しかしその中で、

72) 金属・機械工業の「リスペクタブル」な労働者については、L. Magnusson, *Arbetet vid en svensk verkstad*, s. 235-243; L. Berggren, *Ångvisslans och brickornas värld*, Malmö 1991, s. 315-323.

73) 製材所の労働者の飲酒文化については、D. Gaunt, *Från proletariat till arbetarklass*, Gävleborg 1981, s. 17 を参照。なお、ホリビィは同列に扱っているが、こうした工場不熟練労働者の他律的な規律化の帰結としての「リスペクタビリティ」と、工場熟練労働者の「リスペクタビリティ」とが同質なものであるかどうかは、さらに検討が必要であろう。

71) Ibid., s. 91-105, 166-167.

リンドクヴィストが指摘するように、労働組合の中核的な担い手は、「リスペクタビリティ」を求めるようになっていった⁷⁴⁾。

ところで、こうした労働者文化研究の進展について言及すべきなのは、労働者文化のあり方と、労働者の集合性さらには労働組合の組織的性格とが深く結びついていたことである。例えば、伝統的な都市手工業文化と手工業熟練労働者の労働組合の職業保護主義の関係が想起され、工場熟練労働者の集合性の開放性、社会の規律化・合理化への積極的な対応と産業別労働組合と団体協約締結の推進との関連が予想されるのである。その中で、屋外不熟練労働者とは言え港湾労働者が、独特なサブ・カルチャーを持っていたことが注目される。ノルシェーピングの港湾労働者の間には、子供がまた港湾労働者になるといったことから推測されるように、緊密な家族同志の交際に支えられた古くからの独特な職業文化が存在していた。そして一人前の港湾労働者として働くようになるまでに、そうした人間関係の中で自然と独自の価値観・行動様式がインプットされ再生産されていたのである。ホリビィによれば、そこでは、宵越しの金は持たないという短期的な経済的パースペクティブとそうした集団を維持し、港湾労働者全体の生活水準を維持し向上させようとする長期的な社会的パースペクティブが結びついていた⁷⁵⁾。このような労働者の集合性の性

格が、港湾労働者の労働組合の強さと性格を規定したのではないと思われるのである。前節で見た職場を中心に見る権力関係論は、こうして家族や地域社会での日常生活をも対象とする労働者文化論によってより豊富なものとすることができるのではないだろうか。

5. おわりに

以上のように、スウェーデンにおける労働者階級の形成に関する研究の中から、労働組合運動の生成・展開と労働者文化に関するものに焦点を当て、整理し概観してきた。その内容は、甚だ多岐にわたり、極めて多くの論点を含むものである。しかし、総じてそれらは、労働者階級形成の組織・運動の次元と文化の次元の相互的な関係を見てゆくべきことを示唆していると思われる。

スウェーデンの労働者階級は、急激な工業化や農業社会の解体の中で形成されたのだが、それ故に、様々な出自をもった人々が出会うことによってそのプロセスが進展したのであった。そうした多様な出自は、多様な文化的な背景に対応し、労働者階級は、様々な文化がぶつかりあって融合してゆく中で形成されてきたのである⁷⁶⁾。そして、そのような文化的背景は、職場における労働者の集合性の性格を規定していたと思われる。例えば、手工業熟練労働者には、都市手工業文化の名残が強く窺えるのであり、港湾労働者の職業文化も、恐らく工業化以前に遡れるのである。さらに、このような労働者の集合性の性格が、労働組合組織のあり方に大きく影響を与えていたことが注目されよう。手工業熟練労働者の労働組合の職業保護主義、都市手工業文化の影響をあまり受けていない工場熟練労働者が産業

s. 84-88.

76) 労働運動の団体生活が様々な文化の融合の結果生成したものであることについては、拙稿「日常生活」第4節①を参照。

74) ボヒュースレーン (Bohuslän) の石材加工労働者の飲酒文化については、L.Persson, *Arbete. Politik. Arbetarrörelse*, Göteborg 1984, s. 319-329. パッションのこの研究によれば、そうした飲酒文化は、不規則で分業が進んでいない石材加工業の労働のあり方や移動性の高い労働者の生活様式と結びついていたのであり、それは、この地の労働者にサンディカリズムが普及した背景となった。Ibid., Kap.15.

75) B.Horgby, "Långa och korta planeringsperspektiv i arbetarkulturen", s. 71-72; Dens., *Egensinne och skötsamhet*,

別組合組織への志向を早くから示していたこと、港湾労働者の労働組合の急進性等々が想起されるべきであろう。

一方、逆に労働組合運動の進展や組織活動の発達、労働者の集合性に新しい文化的な特性を与えていたことも指摘できる。例えば、労働組合運動には、使用者に対抗して自らの権力資源を動員する中で「リスペクタビリティ」への志向を強め、メンバーに団体生活全体を通じて「リスペクタブル」な労働者となることを促してゆく傾向が見られた。また、スウェーデンでは早くから産業別組合を中心として労働組合運動が進展し、その集権化も急速に進んでいったのであるが、そのことは、労働者間の新たなアイデンティティの形成に影響を与えていたことも予想されるのである⁷⁷⁾。

また、こうした労働者の組織及びその運動と文化の相互関係については、職場のみに視野を限定してはならず、労働者が日常生活を営む地域社会や家庭に対しても目を向けてゆく必要があると思われる。くり返し述べてきたように、労働運動は、職場でのみ活動を行っていたわけではなく、その諸活動は、労働者の日常生活を包括的に統合する団体生活を構成していた。このような労働運動によるメンバーの日常生活の包括的統合は、労働運動が、使用者に対抗して、その権力資源を動員していったことと関わっていたことが強調されている。労働運動は、規律のとれた組織活動を展開するために、メンバーが「リスペクタブル」となるように、団体生活全体を通じて労働者の規律化を進めていったのである。

それに関連して、前節で触れたオーマルクの建築業の研究が想起される。彼によれば、建築業における団体協約制度の普及と確立に帰結した労使双方の戦略の選択の背景には、労使双方の権力資源の組織的動員の進展と両者の間の力関係の均衡という状況の下で、労使双方が互いの行動について、もしくは経営或は組織運営において計算可能性を求めていったという事情が存在した⁷⁸⁾。すると、権力関係論は、ストックホルム大学の研究プロジェクトに始まり、オーマルク等の手によって発展を見たのであるが、さらに職場における力関係のみならず地域社会に広がった組織活動での権力資源の動員過程に注目することで、労使双方の戦略の選択という視角を通じ、労使関係と労使双方の組織・運動の相互的な展開をより動的的に把握しうる枠組となるのではないかと考えられる。例えば、使用者によるパターン的な経営の展開と労働運動の団体生活の形成の対抗関係が問題となるのである。そしてこのように、地域社会における権力資源の動員過程を分析することで、労働組合運動の生成・展開と日常生活の具体相、即ち文化の問題とを密接に関連づけて考えてゆくことができると思われるのである。

とはいえ、労働者階級の日常生活は、労使関係のみに規定されるのではなかった。例えば特に地域社会においては、地域の政治的・社会的権力構造が問題となるのであり、男女関係は、ノルシェーピングの繊維工業の労働者の例に見られるように、家庭生活にとどまらず職場での生活のあり方にも一定の影響を与えていた。また、地域社会での余暇活動・政治活動、家庭での育児というように、そもそも地域社会や家庭は、職場とは異なる社会的機能をもった文化領域であることを忘れて

とはいえ、労働者階級の日常生活は、労使関係のみに規定されるのではなかった。例えば特に地域社会においては、地域の政治的・社会的権力構造が問題となるのであり、男女関係は、ノルシェーピングの繊維工業の労働者の例に見られるように、家庭生活にとどまらず職場での生活のあり方にも一定の影響を与えていた。また、地域社会での余暇活動・政治活動、家庭での育児というように、そもそも地域社会や家庭は、職場とは異なる社会的機能をもった文化領域であることを忘れて

77) 本稿第3節の最後に言及したストロートの議論を想起していただきたい。また、ホリビは、労組に参加した労働者は、当初未組織労働者に対し、何ら問題なく同僚として接したが、彼らが組織活動を重ね使用者との数々の闘争をくり抜けるにしたがい、未組織労働者とは交際すべきでないというムードが高まっていったことを指摘している。この現象は、いわば、労働者の組織・運動と集合性の乖離と捉えることができよう。B.Horgby, *Egensinne och skötsamhet*, s.170.

78) K.Åmark, *Maktkamp i byggbransch*, Lund 1989. 特に Kap.9 を参照。

はならないであろう。それ故、労働者階級の形成を、組織・運動の次元と文化の次元の2つの面から統一的に把握するには、労使関係を分析の中心としつつも、国家との関係、男女関係などにも注目し、なおかつ職場、地域社会、家庭をそれぞれ自律的な文化領域として検討してゆくことが必要となろう。そして、労働者階級の形成を、こうした職場、地域社会、家庭の3つの領域の織りなすダイナミズムから捉えてゆくべきだと考える。例えば、職場における労働者の集合性の性格は、地域社会や家庭での労働者の日常生活のあり方に規定されていたと同時に、職場での技術革新や生産組織の再編が、労働者の集合性に变化をもたらし、地域社会や家庭での日常生活にも影響を与えていたと思われるのである。

ところで、これに関連して言及すべきなのが、「リスペクタブル」な労働者文化の生成である。

その生成は、スウェーデンにおける近代化・工業化にともなう社会の規律化といった客観的状况に対し、生まれつつあった労働者階級が主体的かつ積極的に対応していった帰結であり、スウェーデンにおける労働者階級の形成を文化の次元で端的に示すものであった。また、そのような志向を持った労働者の主体的組織形成の成果が、「リスペクタビリティ」を追及した労働運動の団体生活であったと言えるであろう。そして、このような主体的対応を可能とした要因の一つとして、スカーリン・フリユクマンの指摘した前工業化期の民衆文化の多様性について考えてゆく必要があると思われる。前工業化期の民衆文化は、必ずしも「始末に負えない」側面ばかりではなかったのである。

また、「リスペクタブル」な労働者文化は、労働運動が他の「国民運動」である禁酒運動などと密接な関係を持って展開したことに示されるように、中間層と労働者階級との様々な形での交流を通じて形成されてきた側面も

持っていた。例えば、以前に指摘したように、労働運動の団体生活の枠組やその中の多くの要素は、禁酒運動や自由教会運動に起源が存在した⁷⁹⁾。そして、労働運動の団体生活における公共的空間の開放性は、このような中間層と労働者階級との交流が進む中で労働者階級が形成され、労働運動が生成・展開していったことを示すものだと考えられるのである。

つまり、こうした「リスペクタブル」な労働者文化の生成は、先に触れたように、労働者が労働運動の権力資源を動員して使用者に対抗していったことと結びついていたのだが、他方では、地域社会の中での労働者と中間層との交流が背景にあったのであり、労働者が労働運動の公共的空間の開放性を前提として「議論する公衆」として社会に積極的に認知されることを求めてゆくことにもつながっていた。「人民の家」や「人民の公園」などは、地域の文化的中心たらんとしていたのである。それ故、労働運動の団体生活は、労働者階級の階級的連帯の基盤であると同時に「市民の学校」としての機能も果たしていたのであり、そのことが、労働者が自らを労働者階級の一員として認識すると同時に、「市民」「国民」として意識するようになってゆくことを促したと思われる。こうした労働運動の団体生活の二重の性格や労働者階級の階級意識の形成の二重性は、スウェーデンの労働運動が「国民運動」として展開したことで表裏の関係にあり、社会民主党が早期に「国民政党」となり、戦間期には、「国民の家」をシンボルとして福祉国家建設を進めたとつながったと考えられる。それ故、スウェーデンにおける労働者階級の形成についての研究に際して、こうした「リスペクタブル」な労働者の出現に示される労働運動の団体生活や労働者の階級意識の二重の性格に注目してゆくことは、福祉国家建設につながるスウェーデンの

79) 拙稿「日常生活」、第3節を参照。

労働運動の歴史的性格を理解する上で不可欠となると思われるのである。

ところで、このような労働者階級の形成の過程においては、中間層との交流の中から伝統的な民衆文化から「リスペクタブル」な労働者文化が分離・生成してくる一方で、伝統的な「始末に負えない」民衆文化を色濃く継承する「頑迷な」労働者文化が生まれていた。それに関連して、アンビョンソンが、「リスペクタブル」な労働者が両面戦争を行っていたことを指摘しているように、「リスペクタブル」な労働者は、伝統的な価値観や行動様式にこだわる「頑迷な」労働者と自分との差を意識することで自己意識を強めていったのであり、実際に「頑迷な」労働者を様々な局面で抑圧していった。

こうして両者が次第に分化し、相互に対立する中で、前述したように、「頑迷な」労働者は、職場、地域社会、家庭においてその再生産の基盤の縮小と変質を余儀なくさせられてゆく。このような「リスペクタブル」な労働者と「頑迷な」労働者との対立は、労働運動の展開に特有のダイナミズムを提供していったと思われる。例えば、前述のように、労働運動を指導していた層に、「リスペクタビリティ」への志向を強く示した者が多かったことが指摘されているのであり、しばしば顕在化した労働運動の指導者層と卒伍層との対立の背景にある要因の一つとして、こうした状況があったことが推測されるのである。また他方では、前述したように、労使双方の権力資源の動員過程が、労働運動内部の「リスペクタブル」な労働者と「頑迷な」労働者との対立関係に影響を与えていたことが予想され

る。

このようにスウェーデンにおける労働者階級の形成は、社会の規律化・合理化に対する対応の相違から2つの種類の労働者文化の生成と結びついてきた。即ち、そうした規律化に積極的に対応し、市民的規範や市民文化を受け入れつつ、労働者階級の階級としての地位の向上を求めてゆく「リスペクタブル」な労働者が担う労働者文化と、自らの集団としてのアイデンティティを確認・強化しつつ、伝統的な規範や生活様式を維持しようとする「頑迷な」労働者が担う労働者文化である。労働者階級の形成は、「リスペクタブル」な労働者文化を中心に見れば、相互に吸引・反発を繰り返しつつ、市民文化、「リスペクタブル」な労働者文化、「頑迷な」労働者文化という3つの文化層の成立を伴っていたのである。一方、スカーリン・フリユクマンによって前工業化期の民衆文化の多面性・多様性といった問題が提起された。それ故、我々は、労働者階級の形成に関しては、多様な前工業化期の民衆文化からの連続面と断絶面の双方の存在を考慮しつつ、日常生活の場として職場、地域社会、家庭を視野に収め、3つの文化層の生成の具体相とそれら相互の間の吸引・反発がもたらす運動に注目してゆかねばならないと思われる。

以上のように、労働者の組織・運動と文化の相互関係という視点からスウェーデンにおける労働者階級の形成の過程を検討してゆくことは、スウェーデンの労働者階級や労働運動の特質を探る上で実り豊かな成果をもたらすことが期待される。今後、さらに研究を進めてゆきたい。